

## 有部の形実有論と経量部の形非実有論（上）

那須円照

部派佛教の中で、表業論が問題とされたとき、有部は身表業は形であると主張した。それに対して、経量部は、同じく身表業は形であるとしながらも、形は仮有であり実有ではないとした。そこで、色処が色(イロ)と形であり、両方とも実有であるとする有部と、色処は色(イロ)のみであるとする経量部との間に論争が生じた。この論争を、純粹に、形が実有であるか非実有であるかという問題に絞って検討するのが本稿の課題である。まず、「形の認識において形は実有であるか、非実有であるかという問題」、次に、それにともない「形は二根取（二根取とは一種の認識対象が、二種の感官で捉えられることである）であり非実有であるか、二根取でなくて実有であるかという問題」を本稿で取り扱うことにする。

この論文で、注目してほしいことは、有部がいかにして形が実有であることを証明し、経量部がこれに対して形が非実有であることをいかにして証明しているかということである。この論文はこの事の解明に尽きる。

### 1 形の認識において形は実有であるか、非実有であるかという問題

#### 1.1 AKBh, AKVY における経量部(世親)の主張

AKBh, AKVY の色(イロ)と形の議論の最初のところに、次のような議論がある。これは、KSPにおいても論じられる。まず、AKBh, AKVY を和訳して検討する。

## 有部の形実有論と経量部の形非実有論(上)(那須)

**AKBh:** 形(samsthāna)は実体として(dravyatas)存在しないと、経量部(sautrāntika)は[言う]。

何故ならば、一方向の側面を有する【物体】において(ekadiñmukha)より多く(bhūyas)生じたところの色(イロ)(varṇa)に対して、「長い(dīrgha)色である」と命名し(prajñapyate)。その同じ【色(イロ)】と比較して、より少なく(alpiyas)【生じたところの色(イロ)】に対しては、「短い(hrasva)【色】である」と【命名し】、四方により多く【生じたところの色(イロ)】に対して、正方形(caturasra)であると【命名し】、全ての場所に平等に(sama)生じたところの色(イロ)に対して、円形(球)(vṛtta)<sup>1</sup>であると【命名する】からである。

[他の形は] 全て同様である。例えば、燃え木(alāta)が、或る方向において、連続している他の場所において(deśāntaresv anantaresu)、連続的に【色(イロ)が】速やかに見られているとき、「長い」と認識され(pratīyate)、【燃え木が】全ての方向に見られているとき、「円形である」(maṇḍala)と【認識される】<sup>2</sup>。

**AKVY:** 一方向の側面を有する【物体】において(ekadiñmukha)、とは、このものにおいて、側面は、或る一定の方向である。一方向の側面が、それにおいてある。

bahutareとは、bhūyasi(より多く)ということである。

[他の形は] 全て同様である、とは、上の(ūrdhvā)一方向の側面を有する【物体】において、より多く(bhūyas)生じたところの【色(イロ)】に対して、凸(unnata)と命名し(prajñapyate)、下方向(adho)においてより多く【生じたところの色(イロ)に】に対して、凹(avanata)と【命名する】。これは、一例(dik)である。

例えば燃え木(alāta)が、とは、【次のような推論式となる】。

**主張** 形は、実有(dravyasat)ではない。

<sup>1</sup> 桜部[1975b].p.80.8-14, 桜部氏の指摘によれば、荻原氏は、AKVY: W.p.25.16, Ś.p.32.8-9を次の様に訳している。「旋円(vṛtta)は球状(vartula)なり。周円(parimandala)は輪状(cakrala)なり。」

<sup>2</sup> AKBh:P.p.194.15-19, Ś.p.573.5-9, Pe.192a.5-7, D.167b.5-6

## インド学チベット学研究

**理由** 色(イロ)(varṇa)を把握する(grahana)ことによって、主張の主題(pakṣa) (=形)が把握されるから。

**実例** 燃え木の輪(旋火輪)のように

、と。或いはまた、

**主張** 形は、実体ではない。

**理由** [形より] 他の色(rūpa)を把握することによって、主張の主題 (=形) が把握されるから。

**実例** 穀物の集り(dhānyarāśi)のように

、と<sup>3</sup>。

次に、KSP説を和訳して検討する

一方向の側面を有する(phyogs gcig gi sgo)多なる(mang po)集合物が見られる(snang ba)とき、長の知識(blo)が生じ(byung)、[一方向の側面を有する]短い[集合物が見られる]とき、短の知識が生じ、全てから(thams cad)、平等に(mnyam pa)[集合物が]見られるとき、円(zlum po)の知識が生じ、中央(dbus)に、多く[集合物が]見られるとき、凸(mthon po)の知識が生じ、[中央に]少なく[集合物が]見られるとき、凹(dma' pa)の知識が生じ、一方向の側面を有する[集合物が]見られるとき、鋭(phya le ba)の知識が生じ、多(sna tshogs)方向の側面を有する[集合物が]見られるとき、不平である(phya le ma)という知識が生じる<sup>4</sup>。

**解説** ここでは、次のようなことが、意図されている。形を認識するという場合に、実は、世親によれば、形を独自に認識しているのではなくて、色(イロ)の極微の集合を認識しているのである。色(イロ)は延長を持たないが、延長を持つと概念的に構想されるのである。この場合、色(イロ)の極微は直接単独で認識できないから、ある程

<sup>3</sup>AKVY:W.p.348.19-25, Ś.p.573.7-11,Pe.5a.7-5b.2,D.4b.5-7

<sup>4</sup>KSP:M.p.4.10-17

## 有部の形実有論と経量部の形非実有論(上)(那須)

度集つたものを認識しているのである。しかし、形は、粗大なものであり、周囲を全て認識しなければ確定できない。世親、称友は、ある程度集つた色(イロ)（この集つた色(イロ)は、分析しても色(イロ)の本体は変らず色(イロ)は実有であると考えられる）をいくつか認識して、その後で、形を概念的に構想するを考えるのである。部分部分では、周囲のはっきりした形は認識できないのである。また、認識されたものは、経量部の場合一瞬で無くなるから（現在有体過未無体論）、眼根と眼識による最後の色(イロ)の知覚と眼根と眼識によるそれまでの色(イロ)の知覚の記憶とで形を意識で概念的に構想すると考えられる。以上の考えは、AKBh,KSPでは、一方向の側面を有する物体においてより多く生じた色(イロ)の集合物に対して長いと命名すること、AKVYでは、旋火輪や、穀物の集りの認識が、色(イロ)の認識を待って、形の認識が生じる例になることにより、考え出された。眼根と眼識によって把握された色(イロ)の集りに対して、形が意識により概念的に構想されるのである。

### 1.2 有部（衆賢）の反論と経量部（世親）の答

ここで、衆賢は四通りの反論をする。このうち一番目と三番目は、AKBh, AKVYに有部の反論として更に詳しく論じられるので、併せて検討する。

#### 1.2.1 『順正理論』における有部（衆賢）の反論1

『順正理論』を和訳して検討する。

この道理は正しくない。相状の認識に異なりがあるからである。もし、一方向に、唯だ、色(イロ)が多く生じれば、相状の認識において、区別がないはずである。既に、長と白との相状の認識において、異なりがある。色(イロ)の外に、別に形がある。現在において（現見）、触があって、同じ根（身根）によって把握されても、相状の認識に区別があるから、本体に区別がある。堅と冷と、或いは煖（火の熱性）と堅とのように。そのように、白と長とは、同じ根（眼根）によって把握されるけれども、しか

## インド学チベット学研究

し、相状の認識に異なりがあるから、本体は別であるはずである<sup>5</sup>。

**解説** 衆賢は、次のように考えるのである。

白と長とは同一の根（眼根）の対象でありながら、白の認識と長の認識というように、相状の認識は異なりがあるから、長と白とは別体であるとする。その同類例として、例えば堅と冷とがともに一つの根（身根）の対象でありながら、相状の認識に異なりがあるから、別に本体があるとされるようなものであると述べられる。この場合、長等を区別して認識する原因是意識である。もし、白と長とを構成する極微の集合が同じものであれば、意識によっても区別されないはずであるが、意識によって区別されるから、白と長とを構成する極微の集合は眼根では無分別に把握されても別の物であるとされるのである。

形（長等）は龐大なものであるから、長等を一度に認識することはできないから、衆賢は形の幾つかの極微を、白と同じく認識すると考えるのである。そして、その形の諸極微を集めて、龐大な長等を認識するのである。よって、長等と長等を構成する形の極微とは、同じものとは言えないであろう。形の極微は長等と言えないからである。しかし、衆賢は、仮有名長等と、それを構成する実有名形の極微の集合とが依り所の極微が同じとして本体が同じであるとする。（『頭宗論』参照<sup>6</sup>）しかし、白く長いものにおける白を構成する色（イロ）の極微と長を構成する形の極微とを別な本体を有するものとして区別したのである。

<sup>5</sup> 『順正理論』:T.29.p.536.a.4-9

<sup>6</sup> 『頭宗論』:T.29.p.861.a.22-23、「色（イロ）の極微は、つまり、長等を成立せしめない。仮有名なるものの依り所が滅壊すれば、仮有名なるものは必ず滅壊するからである。仮有名なるものは、実有名なるものを用いて、自己の本体とするからである。…」

## 有部の形実有論と経量部の形非実有論(上)(那須)

## 1.2.2 AKBh, AKVYにおける有部の反論1

AKBh, AKVYにおいて、有部は『順正理論』よりも鋭く反論する。AKBh, AKVYを和訳して検討する。

**AKBh:** そして、そのような場合〔でも〕諸々の土器(*mr̥dbhājana*)にとって、色(イロ)は異なるが、形は異なるということが見られるではないか<sup>7</sup>。

**AKVY:** そして、そのような場合〔でも〕色(イロ)は異なるが、とは、もし、形は色(イロ)の配置にすぎないならば、鉢(*kunḍa*)等の土器(*mr̥dbhājana*)にとって、色(イロ)が異なるときには、形も異なるであろう。〔形と色(イロ)とは〕別なものではないからである<sup>8</sup>。

**解説** 以上の問い合わせで、有部は次のようなことを意図している。つまり、経量部の言うように、形が、色(イロ)の配置にすぎないなら、色(イロ)が同じ場合に、形(長等)同士の相状の認識が同じであるはずであると、有部は考えるのである。しかし、相状の認識が現実には同じではないから、色(イロ)と形(形の極微の集合)とは異なって両方とも実有であるとする。色(イロ)の形(長、短等)との相状の認識の相違のように、色(イロ)が同じ場合の形(長、短等)同士の相状の認識の相違は意識の概念的構想によって生じるが、その概念的構想が成立する根拠として、色(イロ)と形(極微の集合)とが存在論的に異なることが前提となっている。そして、存在論的に異なるから、眼根と眼識によつては無分別に、色(イロ)と形(極微の集合)、色(イロ)が同じ場合の異なる形(極微の集合)同士を見っていても、色(イロ)と形(極微の集合)は別々な物として存在するのである。有部の場合、概念的に構想された長等(仮有)とその材料である極微の集合(実有)とは本体が同じである。(1.2.1 解説 参照)

<sup>7</sup> AKBh:P.p.195.12, Ś.p.576.5, Pe.193a.1, D.168a.7

<sup>8</sup> AKVY:W.p.350.20-22, Ś.p.576.9-10, Pe.7a.3-4, D.6a.6-7

## インド学チベット学研究

形（ばらばらな極微の集り）が、実有であり、眼根と眼識の対象であると、有部は考えている。そして、ばらばらな極微の集りに意識によって概念的に仮有な長等という名称が構想されると有部は考える。

世親にとってみれば、色(イロ)の極微の集り（結合物）の長等は仮有であり、色(イロ)の単独の極微は実有である。集りの方は、実有でないのである。世親は長等以外に単なる色(イロ)の極微の集りを認めない<sup>9</sup>。

## 1.2.3 AKBh, AKVY における経量部(世親)の答1

AKBh, AKVYにおいて世親と称友は答える。AKBh, AKVYを和訳して検討する。

**AKBh:** 反論。また、例えば、形作られた色(イロ)に対して、長等と命名されるよう、また、例えば、蟻(pipīlika)等には区別はないけれども [蟻等の] 行列(paṅkti)と [蟻等の] 輪(cakra)等の区別が示されるように、形についてもまた、そのようであると説かれた<sup>10</sup>。

**AKVY:** 反論。また、[乃至] 説かれた、云々とは、細説である。例えば、形作られた色(イロ)に対して、長等と命名されるように、ということである。また、一方向の側面を有する [物体] において、[生じた] 色(イロ)に対して云々。また、例えば、蟻等には、云々とは、また、例えば、蟻(pipīlika)等は、同一の色(イロ)を有するもので

<sup>9</sup> 加藤[1989],p.178.18-179.4,AKTA:Pe.114b.2-4,D.95b.5-7,加藤氏は、世親説と同じシュリーラータ説と有部説を比較している箇所を挙げている。「論師シュリーラータは次のようにいう。「諸々の境(viśaya)は実有ではない。五識身は「極微の」あつまりを境としているからである」と。毘婆沙師たちはいう。「五識身の境は実に実有である。極微(paramāṇu)のあつまりが境であるから、これらの極微がかくの如くあつまつて(samghāta)、眼などの識が生ずる因になるのである。【極微が】あつまりでない(asamghāta)ことはないだろうし、或いはこれら（極微）があつまつたものが境であるのだから、【極微の】一つ一つは所縁(alambana)にはならないのである」と。」

<sup>10</sup> AKBh:P.p.195.12-14, Ś.p.576.6-7,Pe.193a.1-3,D.168a.7-168b.1

## 有部の形実有論と経量部の形非実有論(上)(那須)

あるが、しかし、それら（蟻）の行列 (*pañkti*) とは、甲の場所において甲なる様式 (*ādrśin*) であり、乙 [の場所] において乙なる様式である。[蟻等の] 輪 (*cakra*) 等の区別というかく如き等のものも同様である。そのように、色(イロ)には区別がなくても、形の区別はあるであろう<sup>11</sup>。

**解説** 世親によれば、色(イロ)は同じでも、置かれる場所によって、それに概念的に構想される形の様式が変化すると考えている。形を構想する要因として、場所と言うものが世親によって認められていたことが分かる。

AKBhによれば、空間的場所は有部にとって、明と闇という色 (*rūpa*) であるとされる。これらは、色(イロ)としてはあるが、形としてはないとされるから、経量部(世親)がこれを採用しても矛盾はない。明とか闇とかいうものには特定の形はないからである。決まった延長をもたないが、延長をもたせる原因に、空間はなるのである<sup>12</sup>。

### 1.2.4 『順正理論』における有部(衆賢)の反論2

『順正理論』を和訳して検討する。

故に、色の集合物は、分析して、徐々に微かになり、乃至、真ん中において、形の知識を生ぜしめることができるまで、必ず、少分の形の知識の生起の原因があり、形の極微が、真ん中において、なお生じる。道理は必ずそうであるべきである<sup>13</sup>。

**解説** 衆賢は更に、形の極微が認識できるから、形に本体があるとする。衆賢は形の極微を、更に分析されるから究極のものとは考えていないようである。

<sup>11</sup> AKVY:W.p.350.23-27, Ś.p.576.11-15, Pe.7a.4-6, D.6a.7-6b.2

<sup>12</sup> 桜部 [1975a] ([1969] 初版) .p.151.5-6, 「色の中には、いろとしてはあるけれどもかたちとしては無いものがある。青・黄・赤・白・影・光・明・闇というのがそれである。」, p.188.10-14, 「門や窓や口や鼻孔などにおける空隙を空界をと名づける。(1-28a) 空隙といわれるものは何であると知るべきか。明と闇である、と伝説する。(1-28b)」, AKBh:P.p.6.17-18, Ś.p.32.12-13, AKBh:P.p.18.12-15, Ś.p.77.4-7

<sup>13</sup> 『順正理論』:T.29.p.536.a.9-11

## インド学チベット学研究

世親は、この形の極微というものを、色(イロ)の極微と区別がないものとし、色(イロ)の極微のみに統一する。

### 1.2.5 『順正理論』における有部（衆賢）の反論3

『順正理論』を和訳して検討する。まず、色(イロ)のみを認識する場合を述べて、色(イロ)と形は別々であると有部（衆賢）は考える。

色の集合物の中で、唯だ、色(イロ)のみが生起することがあり、形が生起しなければ、それによって、真ん中において、唯だ、色(イロ)の知識のみがあり形【の知識】はない。空中の光明等の色を見るようなものである。

もし、色(イロ)を形と名付けるならば、分量のない色(イロ)の中に、また、形の知識を生起させるはずである。相離れないから。火界の煖（熱性）のように<sup>14</sup>。

**解説** 衆賢は、色(イロ)と形とが同一であるならば、どんな色(イロ)にも、形の知識が、火界に煖があるように生じるはずであるが、分量のない空中の光明は色(イロ)の知識しか生じないから、色(イロ)と形は別々であるとする。

しかし、世親にとってみれば、形を抽出することはできないから、形のない色(イロ)はあっても、色(イロ)のない形はありえないである。よって、形は【色(イロ)から】独立したものとして存在しない<sup>15</sup>。

<sup>14</sup> 『順正理論』:T.29.p.536.a.11-14

<sup>15</sup> 『順正理論』:T.29.p.538.b.28-c.2, 衆賢は、形のみを認識する場合の例を挙げている。根拠は明らかではない。「或いはまた、色の集合物があって、唯だ、形のみ認識することができる。つまり、身表と、共にある大種所造の運動の集合物である。運動が包摂する相続の法の本性を、仮に、設定するからである。本体は真実【有】ではない。ただ、身の集合物の中で、心によって引き起こされた等流の（同類で続く）大種所造の実有な物の集合物の中の諸々の特定の形である。これを、身表と言う。」

## 有部の形実有論と経量部の形非実有論(上)(那須)

### 1.2.6 AKBh, AKVy における有部の反論2

AKBh, AKVyにおいては、有部は形（集合体）のみを認識する場合を述べて、色（イロ）と形とは別々であると考える。KSPでも同様の議論が為される。まず、AKBh, AKVyを和訳して検討する。

**AKBh:** そのような場合、闇の中では、或いは遠くからでは、杭等の色（イロ）を見ないものが、〔杭等の〕長性等を見る [のはどうしてか] <sup>16</sup>。

**AKVy:** そのような場合、闇の中では、云々とは、そのような場合、闇の中では、杭、人、象等の色（イロ）を見ないものが、〔杭等の〕長性、短性、円形等を見る。「それはいかにしてであるか」、というのが、補われるべき言葉である。〔即ち〕もし形は、色（イロ）とは別の種類のものではないならば、〔人々は〕〔闇の中では〕色（イロ）を「青い」、或いは、「黄色い」と見ないように、形をも、「長い」、「短い」と、見ないはずである。しかし、或る時には、見る。それゆえに、形は〔色（イロ）とは〕別の種類のものである、というのである<sup>17</sup>。」

次に、KSPを和訳して検討する。

もし、そのようであるならば、遠く (thag ring po) からでは、集合物である色（イロ）が対象 (dmigs) として決定され (phyed) ずに、形が対象として決定されるのはいかにしてか<sup>18</sup>。

**解説** 闇の中では、色（イロ）を判別せずに、形（集合体）を判別する場合があると、有部は述べ、形は色（イロ）とは別の実有な存在であると有部は考える。世親（経量部）のように、色（イロ）を認識してから形を認識するのであれば、形だけこのように認識

<sup>16</sup> AKBh:P.p.195.14-15, Š.p.576.8,Pe.193a.3,D.168b.1

<sup>17</sup> AKVy:W.p.350.27-32, Š.p.576.16-20,Pe.7a.6-7b.1,D.6b.2-4

<sup>18</sup> KSP:M.p.5.11-13

## インド学チベット学研究

されることは有りえないのではないかと、有部は考へるのである。しかし、この場合も形の極微の集合のみとしての形は、實有であるが、それに名付けられた長等は實有ではないことは、言うまでもないことである。

### 1.2.7 AKBh, AKVy における経量部(世親)の答2

AKBh, AKVyにおいて世親と称友は答える。KSPにも同様の議論がある。まず、AKBh, AKVyを和訳して検討する。

**AKBh:** 彼らは、その場所で、色(イロ)を不明瞭に(avyaktam)見るから、長等の想定をする。行列(pañkti)と軍団(senā)とを想定するように。そして、このことは、そうであると知るべきである。時には、区別が確認されないままである集合体のみが、不明瞭に見られる。これは、そういうものだと<sup>19</sup>。

**AKVy:** 行列(pañkti)と軍団(senā)とを想定するように、とは、例えば、闇の中で、鳥(pakṣin)の群れ或いは蟻の群れを不明瞭に(avyaktam)見て、「長い行列である」と想定するように、或いは、例えば、同じ闇の中で、象等を不明瞭に見て、「この軍団は円形のものとして、配置されている」と想定するように、それと同様である。そして、このことは、そうであると知るべきである、とは、「たとえ、[色(イロ)とは]別の種類のものである形はなくても、彼らは、そこに、色(イロ)のみを不明瞭に見て、長等を想定する」と今説かれたようである。時には云々と述べられている。区別が確認されないままであるとは、形が確認されないままであり、青性等が見られないままである、集合体のみが、不明瞭に見られるということである。そして、色(イロ)と形とを離れた色処はないから、決して他のどんな実体も考えられないように、それと同じように、形も色(イロ)を離れたものとして、考えるべきではない<sup>20</sup>。

<sup>19</sup> AKBh:P.p.195.15-17, Ś.p.576.9-577.2, Pe.193a.3-5, D.168b.1-2

<sup>20</sup> AKVy:W.p.350.32-351.9, Ś.p.576.20-577.8, Pe.7b.1-5, D.6b.4-7

## 有部の形実有論と経量部の形非実有論(上)(那須)

次にKSPを和訳して検討する。

まず、諸々の形が、対象として決定されずに、それ（諸々の色（イロ））の諸々の行列（dngar ka）と集合体（tshogs）の形が対象として決定されるのはいかにしてか。そこには、別の実体（rdzas）はない。

闇（mun khung）の中の或いは遠方の集合物であるそれにおいては、両者（色（イロ）と形）共に対象として決定されずに、「これは、そういうもの（ci zhig）だ」と、或る不明瞭な（mi gsal ba）ものが、把握される場合、そこに、何が見られるか。それゆえに、その時には、色（イロ）が、不明瞭に把握されていると知るべきである<sup>21</sup>。

**解説** 形（集合体）を認識する場合、不明瞭に色（イロ）をみて、形（集合体）を構想すると世親は考えるのである。形の極微は、色（イロ）の極微以外には存在しないと世親は考える。色（イロ）を明瞭に把握しなくても、形（集合体＝長等＝仮有）を明瞭に把握することは、世親にとって有るのである。色（イロ）は、この場合、形（集合体＝長等＝仮有）の質料因にすぎない。

この場所に関するPoussinの解釈を、Pruden[1988a]は、次の様に英訳している。“One sees an army without seeing its soldiers; but this does not prove that an army exists apart from its soldiers. In the same way one sees shape without distinguishing its color.”<sup>22</sup>

### 1.2.8 『順正理論』における有部（衆賢）の反論4

旋火輪の例えに対して、衆賢は『順正理論』において反論する。これは、認識の問題というよりも、存在の問題であるが、傍論として取り扱う。『順正理論』を和訳して検討する。

<sup>21</sup>KSP:M.p.5.14-20

<sup>22</sup>Pruden[1988a].p.710.28-29

## インド学チベット学研究

彼の旋火輪の喩えは論証能力を持たない。余他の所で成立しているもの（=形）によって、比喩的に表現することができるからである。

つまり、余他の場所に、長・円等の依り所である実有の原因があり、同時に、間断なく、多方に特定の仕方で配置された〔極微〕によって成立する色の集合物において、長等が成立している。

それに依存するから、旋火輪等の色において、異なるときに、別の場所に、間断なく生じる場合、構想して、比喩的に長・円等を形成する。未だかつて、世俗と勝義と共に成立していないものがあって、しかも、比喩的に成立することができるのを見たことがない<sup>23</sup>。

**解説** 衆賢は、形の極微と、そのばらばらな集合物自体とを、勝義有（実有）と考え、形の集合物全体に概念的に構想された長等を世俗有と考える。そして、世俗と勝義とに依存してのみ、火の真っ直ぐな連続（長）や旋火輪（円）が、比喩的に成立すると衆賢は考えている。衆賢は、勝義有と世俗有以外に、それらに依存する比喩的に成立するものというものを認めていたのである。それが、火の真っ直ぐな連続の長や旋火輪の円である。

これは、集合物としても存在が認められない。この場合の長や円は、火の点が真っ直ぐに連続的に生じたり回転してできたものであり、長や円のように見えるだけであるからである。

世親は、色(イロ)の極微のみを勝義有とする。形の極微や、集合体（結合物）＝長等は世親にとって、勝義有とは、認められない。

---

<sup>23</sup> 『順正理論』:T.29.p.536.a.14-20

## 有部の形実有論と経量部の形非実有論(上)(那須)

### 2 形は二根取であり非実有であるか、二根取でなくて実有であるかという問題

#### 2.1 AKBhにおける経量部(世親)の主張1

世親はAKBhにおいて主張する。AKBhを和訳して検討する。

形は実有ではない。何故ならば、もし「形が実有で」あるならば、

二つの「根」によって、「形が」把握されるべきものとなるであろう。

何故ならば、眼(cakṣus)「根」によって、見ることによって「長い」と確認され(avasīyate)、  
身根(kāyendriya)によって触れることによって、また、「長い」と確認され]、それ  
(形)が、二「根」によって把握される(grahaṇa)ことになるであろうが、しかし、色  
処が二「根」によって、把握されることはないからである<sup>24</sup>。

**解説** 一種類の対象は、一種類の根でのみ把握されるというのが、有部や、経量部の定説である。世親は、形という対象は、眼根と身根という二つの根で直接知覚されるとするから、一種類の対象が、二種類の根で把握されることになり、定説と矛盾する。故に、世親は形は実有ではないと批判する。

この場合、世親は有部が、形（形の極微のばらばらな集合）を眼根、眼識で実有なものとして把握し、そして、意識でこれは長いと確認すると主張すると想定している。

#### 2.2 AKVyにおける有部の反論1

有部はAKVyにおいて反論する。AKVyを和訳して検討する。

それ(形)が、二「根」によって把握されることになるであろう、と言われて、ヴァイバーシカは【次のように】言うであろう。「長性(dīrghatva)等は身根(kāyendriya)によって把握されるのではない。それではどうか。そのように配置された(samnivista)触(spraṣṭavya)である諸々の部分(avayava)においてのみ、[意識による]長等の把握

---

<sup>24</sup> AKBh:P.p.194.19-23,Ś.p.573.9-12,Pe.192a.7-192b.1,D.167b.6-168a.1

## インド学チベット学研究

が生じる。それゆえに、それ（形）が、二〔根〕によって把握されることにはならない」と<sup>25</sup>。

**解説** 有部は、形について二根取を認めない。よって、身根、身識で把握された長等という形で配置された触の極微の集合に基づいて、長等の認識が起こる。この場合、有部は触の極微の集合を身根、身識で把握し、それに対して、長等を意識によって概念的に構想しているのである。形の極微の集合を身根、身識で把握しているのではないから、形は二根取ではないとする。この場合、形の極微の集合は、眼根、眼識で把握され、実有であるが、それ以外のものによっては認識されない。それ（形の極微の集合）に意識で概念的に構想された長等は非実有である。また、触の極微の集合に意識で概念的に構想された長等も非実有である。しかし、形の極微の集合が実有であるから、これは眼根のみによる一根取である。

### 2.3 AKBh,AKVy の経量部(世親)の主張1

AKBh, AKVyにおいて世親と称友は主張する。AKBh, AKVyを和訳して検討する。

**AKBh:** 或いは、例えば、触(sprastavya)において、長等が把握されるように、色(イロ)においても〔長等が把握され〕得るであろう<sup>26</sup>。

**AKVy:** それに対して、次のことが、或いは、例えば、触において云々と〔詳しく〕言われる。  
どのような意味なのか。

---

<sup>25</sup>AKVy:W.p.348.25-28, Š.p.573.12-14,Pe.5b.2-3,D.4b.7-5a.1

<sup>26</sup>AKBh:P.p.194.23-24, Š.p.573.13,Pe.192b.1-2,D.168a.1

## 有部の形実有論と経量部の形非実有論(上)(那須)

例えば、触において、長、短(hrasva)等が把握されるが、しかし、形は、触処(sprastav-yayatana)によって包含されないように、色(イロ)においても、長等が把握され得るであろう。しかし、別のもの(arthāntara)であるとすれば、色処(rūpāyatana)によって包含される形はない、という意味である<sup>27</sup>。

**解説** 世親、称友は、触処において、長、短等が把握されるとき、形は触に基づいて意識によって概念的に構想されたものであるから、触処に含まれないのであるから、色処において、長、短等が把握されるとき、形は、同様に、色(イロ)に基づいて意識によって概念的に構想されたものであるから、色処に含まれないとしてもよいのではないかと、主張する。

そこで、西[1935]は、この箇所についての注記で、世親が、経量部では、この形(長等)が、意識の対象であることについて次の様に述べている。

「…曰はく、身根が触境を取るとき、其の触境によって意識が長短の相を取る。即ち長短は意識の所取にして、仮法なり。眼識が顕色を取る場合にも、亦眼識は青黄等を取り、意識は長短の形色を取る。即ち形色は触と顕色とによりて仮に建立したるものに外ならずといふにあり<sup>28</sup>。」西[1935]は、この注記の根拠となる資料を挙げていない。

しかし、このことを、工藤[1983]は、AKVYで裏付けている。

「…けれども経部派のこのĀcārya(Vasubandhu)はこの義を認めない。何故ならば、この形(色)を認識するのは眼ではなくて、これは意識の遍計(parikalpita)であるからである。即ち、ただの顕(色)の配置の相違が形(色)であるからである。いったい形(色)という実体(dravya)はあるのか。顕(色)を認識しない時に形(色)の認識はないからである。そしてこれは業俱舍処(=業品)にて検討されるであろう<sup>29</sup>。」

<sup>27</sup> AKVY:W.p.348.28-349.3, Ś.p.573.14-574.3, Pe.5b.3-5, D.5a.1-3

<sup>28</sup> 西[1935].p.210.脚注.【六五】

<sup>29</sup> 工藤[1983].p.(4).13-20, AKVY:W.p.26.14-18, .p.33.21-24

## インド学チベット学研究

## 2.4 AKBh, AKVYにおける有部の反論1

有部はAKBh, AKVYにおいて、又、異なった理論を展開する。AKBh, AKVYを和訳して検討する。

**AKBh:** それ(形)については、触と共ににはたらくから、記憶(*smṛti*)のみが生じる。しかし、直接に【身根が】把握すること(*sāksād grahanam*)はない。

例えば、火の色(イロ)(*agnirūpa*)を見ることによって(*drṣṭvā*)、それ(火)の熱性(*uṣṇatā*)についての記憶が生じ、また、花の香(*puspagandha*)を嗅ぐことによって(*ghratvā*)、その色(イロ)(*varṇa*)について【記憶が生じる】ように<sup>30</sup>。

**AKVY:** 【これに対して】また、ヴァイバーシカは言う。それ(形)については、記憶(*smṛti*)のみが、云々と。その形については、触と共ににはたらくから、記憶のみが【生じる】。【即ち】滑性(*slakṣṇatva*)等という触と共ににはたらく性質によって、【記憶のみが】生じる。しかし、長等の形を直接に【身根が】把握すること(*sāksād grahanam*)はない。

例えば、【色(イロ)と熱性とが】共にはたらくから、火の色(イロ)(*agnirūpa*)を見ることによって(*drṣṭvā*)、その火の熱性(*uṣṇatā*)についての記憶が生じ、また、【香と色(イロ)とが】共にはたらくから、花(*puspā*)の有する、【例えば】チャンパカ(*campaka*)の有する香(*gandha*)を嗅ぐことによって(*ghratvā*)その色(イロ)についても、記憶が【生じる】ように<sup>31</sup>。

**解説** 以前に眼根、眼識で、形の極微のばらばらな集合を把握し、それに基づいて長等を意識で概念的に構想し、その後、身根で触を把握するとき、その触と共に、以前に、意識で認識していた長等の記憶がはたらき、触と共に長等の記憶が生じる、とこ

<sup>30</sup> AKBh:P.p.194.24-26, Ś.p.574.1-3,Pe.192b.2-3,D.168a.1-2

<sup>31</sup> AKVY:W.p.349.3-8, Ś.p.574.4-8,Pe.5b.5-7,D.5a.3-4

## 有部の形実有論と経量部の形非実有論(上)(那須)

の場合の有部は考えるのである。

## 2.5 『順正理論』における有部（衆賢）の反論

『順正理論』において衆賢は、更に反論をする。『順正理論』を和訳して検討する。

二つの根によって把握されるという論難もまた、成立しない。長等を、唯だ、意識の対象とするからである。諸々の仮有は、唯だ、意識の認識対象とするからである。前に既に論じたように<sup>32</sup>。長等を形成するそのような極微の、かくかくしかじかの配置としての集合物を形と言う。これは、無分別である眼識の対象であり、身〔識〕がこのような形を認識するのではない。身根に依存して、堅、湿等を認識するように、長、短等を認識するのはそのようではないからである。「闇の中に、堅、湿等を認識し、即ち、その時において、或いは、次後の時、つまり、長、短等の相状を認識する」のではないからである。

必ず、一面に多く触が生じる中において、身根という門によって、触を分別し終わつて、まさに、推理して、触と共ににはたらく、眼識によって引かれた意識によって受けられるそのような特定の相状の形を知る（思い出す）ことは、火の色（イロ）を見、及び、花の香を嗅ぎ、共にはたらく火の触と、花の色（イロ）を思い出すようなものである。現在において（現見）、眼識は、適宜、同時に、形と色（イロ）とを共に認識することがある。意識の分別は、前後が定まることはない。色（イロ）と形とのこれらは、同一の眼識の認識対象であるからである。意識の分別は、時の異なりによって、相状の認識が異なるから、その本体は同じではない。形はまた、触ではない。どうして、身根は、形を把握するということがあろうか。故に、二つの根によって把握されるはずであると非難するべきではない<sup>33</sup>。

<sup>32</sup>該当箇所が見つからなかった。

<sup>33</sup>『順正理論』:T.29.p.536.a.20-b.5

## インド学チベット学研究

**解説** 衆賢は、長等を意識の対象であるとして、形が身根と眼根とで把握されると言う説を否定する。

身根に依存して、触の極微の集合を把握して、意識で触（堅、湿等）を認識するときに、或いはその後に、身根に依存して、形の極微の集合を把握して、意識で形（長、短等）を認識するのではないとする。

では、衆賢は触を認識したときに生じる形の知識は、どのようにして生じると考えているのであろうか。

まず、視覚的認識の説明が為される。眼識は眼根と共に、色処である色(イロ)と形を同時に無分別に極微の集りとして認識する。そして、意識によって、長や白であると概念的に構想する。この概念的構想の順序は色(イロ)が先に為されたり、形が先に為されたりする。

そして、触を身根に依存して、意識で概念的に構想するとき、眼識によって引かれた意識によって概念的に構想された特定の相状の形（長等）を思い出して知るのである。よって、形は二根取ではないのである。この眼根に依存した意識の対象（長等という特定の形）が、触と共に働くとき、身根に依存した意識が長等を認識するかのごとく錯覚するのである。

## 2.6 AKBh, AKVYにおける経量部(世親)の答1

AKBh, AKVYにおいて世親と称友は答える。AKBh, AKVYを和訳して検討する。

**AKBh:** これ（火）については、[火の熱性と火の色(イロ)とは] 逸脱していない (avyabhicāra) から、甲（火の色(イロ)）によって乙（火の熱性）の記憶(smarana)が [生じる] のは合理的である。しかし、いかなる触も、ある形について決定されて(niyata) いない。[決定されておれば] それ（形）について、記憶が定まって(niyamena) 生じ

## 有部の形実有論と経量部の形非実有論(上)(那須)

るはずであるから<sup>34</sup>。

AKVY: [世親は] 言う。これ(火)については合理的である、云々と。この火については、熱性(uṣṇatā)と色(イロ)とは、逸脱していない(avyabhicāra)から、甲によって乙の記憶(smarana)が【生じる】のは合理的である。[例えば] 火の色(イロ)によって、[火の] 热性の【記憶】が、また、花の香によって、それ(花)の色(イロ)の【記憶】が生じることは【合理的である】。しかし、いかなる云々とは、しかし、いかなる滑性等の触も、長等のある形について決定されて(niyata)いない。[決定されでおれば] その形について、記憶が、触に触れることによって、定まって(niyamena)生じるはずであるから。なぜなら、火の色(イロ)があるところには、それ(火)の熱性がなくてはならないし、また、チャンパカの香があるところには、それ(チャンパカ)の色(イロ)がなくてはならないが、しかし、滑性、或いは、粗性があるところには、長性、或いは、短性がなくてはならないということはないからである。それゆえに、それ(火)の熱性と色(イロ)とについては、定まって【記憶が生じることが】合理的であるが、形によっても、定まって、記憶が【生じるということには】ならない<sup>35</sup>。

**解説** 火の熱性には、火の色(イロ)が不可離に随伴し、チャンパカという花の香には、チャンパカの花の色(イロ)が不可離に随伴しているが、或る触に、或る形が不可離に随伴していることはないのである。この場合有部は、何の触であり、形であるかを特定していないから、特定の触を認識して、特定の形を思い出すことが定まらないことになるのである。

坂本[1981]では、有部の考えが論理的におかしいと、次の様に批判されている。

「…しかしながら触と形と相い離れざる場合は仮に一応しかりと許すとしても、水

<sup>34</sup> AKBh:P.p.194.26-195.1, Ś.p.574.4-5, Pe.192b.3, D.168a.2

<sup>35</sup> AKVY:W.p.349.8-16, Ś.p.574.9-16, Pe.5b.8-6a.3, D.5a.5-5b.1

## インド学チベット学研究

中に手を入れて冷を覚ゆるがごとき時の形と触とが相い離るる場合は、有部の議論はたちまち成り立たなくなつて来る<sup>36</sup>。」これは、冷があるところに、必ずしも特定の形が定まらないことを示している。水の形は色々に変化するからである。

### 2.7 『順正理論』における有部（衆賢）の反論2

#### 2.7.1 反論2-1

『順正理論』に説かれている。『順正理論』を和訳して検討する。

これもまた、合理的ではない。現在において（現見）、諸々の触の集合物の中において、形が〔認識上〕定まることがあるから。つまり、形は触において、定まることがないけれども、しかし、一方で多くの触が生じる中に、定まって、長という色〔の知〕が起こり、全ての処に触が、遍く生じる中に、定まって、円という色〔の知〕が起こる。そのようなもの等の種類は、慣習にしたがって、当然知るべきである。故に、触は形において、決定する者としてある。触は、色(イロ)において、定まりがあることは、形のようではない。触がそのように配置されて、そのような場合、色(イロ)が決定することが、形のようではないからである<sup>37</sup>。

**解説** 衆賢は、特定の配置された触の集合と形の間に不可離な随伴関係があると考えている。しかし、その他の配置の触自身と形との間には、不可離な随伴関係を認めることはできないと考えられる。そして、色(イロ)と触との間には、配置によっても、不可離な随伴関係は、認められないとする。しかし、衆賢はこの触の配置と形との随伴関係を、触の配置を認識するときに、視覚的認識の際の形の記憶を思い出すという関係であるとあくまでも考えている。

<sup>36</sup>坂本[1981].p.409.6-8

<sup>37</sup>『順正理論』:T.29.p.536.b.7-13

## 有部の形実有論と経量部の形非実有論(上)(那須)

## 2.7.2 反論2-2

『順正理論』において説かれている。『順正理論』を和訳して検討する。

また、眼と喉の中でも、また、煙の触を得、或る時には、鼻によって、その煙の香を嗅ぎ、これによって、煙の中の色(イロ)を認識する。また、色(イロ)は、二つの根によって把握されて、実有ではないはずである。また、以上の事と、彼(世親説)と、意味が同じであるべきであるから。つまり、煖(火の熱性)という触が、色(イロ)において、及び、白という色(イロ)が、香において、また、定まりがないことは、形が触において〔思い出され、知られることが無い〕ように、その火の色(イロ)、花の香によって、火の触、花の色(イロ)を思い出し、知ることはないはずであるからである。以上の議論によって、形が色(イロ)とは異なって、別に本体があるという主張は否定されない<sup>38</sup>。

**解説** 衆賢は世親のように身根と眼根で形を把握するとすれば、衆賢は、色(イロ)の場合も、身根と眼根或いは、鼻根と眼根で、色(イロ)を把握する場合を認めざるを得ない。

また、衆賢は、火の触と火の色(イロ)、花の香と花の色(イロ)にも随伴関係はないから、随伴関係がなくても色(イロ)の本体を認めるならば、触と形とに随伴関係がなくても形の本体を認めるべきであるとする。触を認識したとき、特定の形が思い出されなくても、その特定の形は眼根、眼識で把握され、意識で確定されるから、本体があるとする。

## 2.8 AKBh, AKVYにおける経量部(世親)の答2

AKBh, AKVYにおいて世親と称友は答える。AKBh, AKVYを和訳して検討する。

---

<sup>38</sup> 『順正理論』:T.29.p.536.b.13-18

## インド学チベット学研究

**AKBh:** もし、定まって、共にはたらくということはなくとも、形について、定まって、記憶が生じるならば、色(イロ)についても【記憶が定まって】生じるであろう。或いは、色(イロ)のように、形についてもまた、定まって【記憶が】生じるとは限らないであろう。しかし、以上のようなではない。触によって、これ(形)の記憶が【生じることは】合理的ではない<sup>39</sup>。

**AKVY:** もし、触と形とは、定まって、共にはたらくということはなくとも、形について、定まって、記憶が生じるならば、色(イロ)についても【記憶が定まって】生じるであろう。定まって、記憶が【生じるであろう】と続く。同様に、触に触れることによって、【色(イロ)を】想起するであろうという意味である。もし、定まって、色(イロ)の記憶が生じるというわけではないならば、或いは、色(イロ)のように、形についてもまた、定まって【記憶が】生じるとは限らないであろう。即ち、長に対して、短を認識し、短に対して、長を認識するであろう。何故か。何故ならば、触によって、定まって、色(イロ)についての記憶が生じるとは限らないからである。[即ち] 或る時には、赤(rakta)に対して、黄(pīta)を認識し、[或る時には] 黄に対して、赤を認識するであろう。しかし、以上のようなではない、とは、どういうふうに、そのようでないのか。あたかも、色(イロ)についての記憶(saṃsmaraṇa)が、定まって、生じるとは限らないように、同様に、形について【の記憶】もまた、定まって【生じる】とは限らないということである。色(イロ)についての記憶は、定まって、生じるとは限らないが、しかし、形について【の記憶】は、定まって【生じる】。故に、触によって、この形の記憶が【生じることは】合理的ではない。

それでは、どのようにして、「長」という知識、或いは、「短」という知識(buddhi)が生じるのか。これは、次のように述べられている。色(イロ)、或いは触が、一方の側面を有する【物体】において、より多く把握されるとき、「長」という概念知

<sup>39</sup> AKBh:P.p.195.1-3, Ś.p.574.6-575.1,Pe.192b.4-5,D.168a.3-4

## 有部の形実有論と経量部の形非実有論(上)(那須)

(vikalpabuddhi) が [生じ]、[色(イロ)、或いは触が] より少なく [把握されるとき] 「短」という概念知が [生じる]、云々と知るべきである<sup>40</sup>。

**解説** 世親、称友は、有部の言うように、形が実有であるならば、触と形とが共に働くかなければ（随伴しなければ）、形の記憶は、色(イロ)の記憶のように必ず思い出されることはないと考える。

しかし、形の知識は触の配置に対応して必ず定まって生じるから、世親、称友は次のように考える。色(イロ)の配置、触の配置に基づいて、色(イロ)が眼根で多く把握されるときや、触が身根で多く把握されるとき、意識で色(イロ)と触の仮有な配置に基づいて、決まった形の概念知が生じるのである。故に形は二根取で非実有である。

この部分を、西[1935]は、注記している。

「然るに実際に於いては、目を閉じて触境に触るれば、長短の形は知るべきも、青赤の顔色は不可知なり。故に、身根が触境に触るる時に、昔、見たる形色を思ひ出すなりとは云ふべからず。若し昔見しものを想起するならば、同じく昔見し顔色をも思ひ出すべきなり。是に由つて習を取るが故に形を憶すと云ふ理なし<sup>41</sup>。」

**主要な議論を最後に整理しておく。**

1. 有部の理論-1 有部は、ある特定の認識には、特定の認識対象があるという理論を立てる。眼根によって色(イロ)と形とを同時に無分別に認識するが、意識によって、形と色(イロ)とが区別されるから、色(イロ)と形とは別々に実有なものとして存在するとする。<1.2.1参照>
2. 経量部の理論-1 それに対して、経量部は、色処の認識の際に、眼根と意識で、触処の認識の際に、身根と意識とで、形を認識することがあるから、形は二根取であることになり非実有であるとする。<2.1参照>

---

<sup>40</sup> AKVY.W.p.349.16-28, .574.17-575.7, Pe.6a.3-8, D.5b.1-5

<sup>41</sup> 西[1935].p.211.脚注.【七三】

## インド学チベット学研究

3. 有部の理論-2 それに対して、有部は、触の認識の際の形の認識は、眼根と意識で前に認識していた形を思い出すのであるから、直接知覚ではなく、二根取にはならないとする。<2.4,2.5参照>
4. 経量部の理論-2 それに対して、経量部は、触の認識の際、記憶を思い出すのなら、必ずしも特定の形の記憶が思い出されないが、形の認識は定まって生じるから、触の非実有な配置に対して、身根と意識とで形の概念知が生じるとする。形は、色(イロ)の非実有な配置に対して、眼根と意識とでも認識されるから、形は二根取で非実有であることになる。<2.8参照>
5. 経量部は、色(イロ)と触とを認識してから、形を認識するとするのであり、実有な色(イロ)と触とは、形の質料因として、仮有な形と切り離せない。<1.2.7参考>

## 本文中の略号

1. AKBh:Abhidharmakośabhāṣya
2. AKVy:Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā
3. KSP:Karmasiddhiprakarana
4. 『順正理論』:阿毘達磨順正理論
5. 『頭宗論』:阿毘達磨藏頭宗論
6. AKTA:Abhidharmakośabhāṣyatīkā Tattvārtha nāma

## &lt;テキスト及び翻訳研究&gt;

1. AKBh:P,Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu, 2nd ed., P.Pradhan, Patna, 1975 (1st ed. 1967)
2. AKBh, AKVy, Ś : Abhidharmakośa & Bhāṣya of Ācārya Vasubandhu with Sphuṭārthā commentary of Ācārya Yaśomitra critically edited by Swāmī Dwārikādās Śastri Ācārya (Vyākaraṇa Pāli & Bauddha Darśana) Bauddha Bharati P.B.49, Varanasi-I(India) 1987, 3rd ed. Bauddha Bharati Series- 5,6,7,9

有部の形実有論と経量部の形非実有論(上)(那須)

3. AKBh : Pe, Tibet 訳, 北京版, Chos mngon pa'i mdzod kyi bshad pa, Tr. by Jinamitra and Dpal brtsegs, No.5591, Vol. 115
4. AKBh : D, Tibet 訳, 台北デルゲ版, 4095 # 4090, Vol.41 同上
5. AKBh : 漢訳, 玄奘訳, 『阿毘達磨俱舍論』, 大正新修大蔵經, Vol.29, No.1558
6. 西[1935], 国訳一切經, 毘曇部26 上, 西義雄訳, 『阿毘達磨俱舍論』, 大東出版社
7. 木村、荻原[1926]([1919] 初版), 国訳大蔵經, 論部 第十二卷, 木村泰賢, 荻原雲來訳, 『阿毘達磨俱舍論』, 国民文庫刊行会
8. AKVY:W, Sphuṭārtha Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra, ed. U.Wogihara, (Sankibo Buddhist Book Store. Tokyo, 1989 rep.) 1936 初版
9. AKVY : Pe, Tibet 訳, 北京版, Chos mngon pa'i mdzod kyi 'grel bshad, Tr. by Visuddhisimha(Visiuddhasimha) and Dpal brtsegs, No.5593, Vol.116-117
10. AKVY : D, Tibet 訳, 台北デルゲ版, 4097 # 4092, Vol.41 同上
11. 舟橋[1987], 『俱舍論の原典解明 業品』, 舟橋一哉, 法藏館
12. Pruden[1988a], English translation by Leo M. Pruden, by Louis de la Valee Poussin, "Abhidharmakośabhāṣyam Volume 2", Asian Humanities Press, Berkeley, California
13. 『順正理論』: T.29, 『阿毘達磨順正理論』, 玄奘訳, 大正新修大蔵經, Vol.29, No. 1562
14. 赤沼[1933a], 国訳一切經, 毘曇部27, 赤沼智善訳, 『阿毘達磨順正理論』, 大東出版社
15. 赤沼[1933b], 国訳一切經, 毘曇部28, 赤沼智善訳, 『阿毘達磨順正理論』, 大東出版社
16. 『頭宗論』: T.29, 『阿毘達磨藏頭宗論』, 玄奘訳, 大正新修大蔵經, Vol.29, No.1563
17. 林[1934], 国訳一切經, 毘曇部23, 林五邦訳, 『阿毘達磨藏頭宗論』, 大東出版社

## インド学チベット学研究

18. AKTA : Pe,Tibet 訳, 北京版, Chos mngon pa'i mdzod kyi bshad pa'i rgya cher 'grel pa don gyi de kho na nyid ces bya ba, Abhidharmakośabhāṣyatīkā Tattvārtha nāma, Sthiramati, Tr. by Dharmapālabhadra, No.5875, Vol. 146
19. AKTA : D,Tibet 訳, 台北デルゲ版, 4428 # 4421 同上
20. KSP : M, 『成業論』, チベット訳校訂本, 室寺義仁, 1985
21. KSP : 漢訳, 玄奘訳, 『大乘成業論』, 大正新修大藏經, Vol.31, No.1608
22. 泉[1977] ([1934] 初版), 国訳一切經, 論集部2, 泉芳環訳, 『大乘成業論』, 大東出版社
23. 山口[1951], 『世親の成業論』, 山口益, 法藏館
24. Anacker[1984], S.Anacker, "Seven Works of Vasubandhu", Delhi
25. Pruden[1988b], English translation by Leo M. Pruden, by Étienne Lamotte, "Karmasiddhiprakarana The Treatise on Action by Vasubandhu", Asian Humanities Press, Berkeley, California

### <二次資料>

1. 加藤[1989] : 加藤純章, 『経量部の研究』, 春秋社
2. 工藤[1983] : 工藤道由, 「身表形色説—表業・無表業—」, 『仏教学』16, 仏教学研究会
3. 坂本[1981] : 坂本幸男, 『阿毘達磨の研究』, 大東出版社
4. 桜部[1975a] ([1969] 初版) : 桜部建, 『俱舍論の研究—界・根品』, 法藏館
5. 桜部[1975b] : 桜部建, 『仏教語の研究』, 文英堂

キーワード 世親, 衆賢, 形